
黒ウサギ隊の5人組（仮）

田中太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒ウサギ隊の5人組（仮）

【NZコード】

N10007Z

【作者名】

田中太郎

【あらすじ】

ドイツ軍には、特別技術課という部署があった。その部署の人間は、とにかく変わり者で男ながら、ISを動かせる男まで存在する始末だ。そんな彼らが、ISの物語を引っかき回す。

プロローグ（前書き）

駄文ですが、よろしくお願ひいたします。

全200話を予定しています。

長丁場ですね。

プロローグ

IS インフィニットストラトスの登場によつて世界は変わつた。
女尊男卑の世界に変わつた。

何故なら、ISは基本的に女性にしか反応しないからだ。

そして、その女尊男卑は軍隊にまで及んでいた。

ある日のドイツ軍基地…

金髪の男性がため息をつきながら歩いていた。

「…ハア……」

そして、特別技術課と書かれたプレートのあるところへ入る。
中には、4人ほどの人が居た。

「皆、聞いてくれ。」

金髪の男性は、その金髪を搔き上げ言つと4人は、金髪の男に注意
を向けた。

「今日の新パーティ、次世代型ミサイル試作機ver2・5のテスト
は中止になつた。
(へへ、最近こればつかだ…)」

金髪の男も落胆しているよつて、他の4人も目に見えるよつて落胆している。

「またですか？」これで138回目ですよ～？」

語尾を伸ばして喋る長い黒髪に黒メガネの青年は、バトル。

「また、ヒツつか？つぞ」つすね、ヒツ。」

部活等の後輩の様な喋り方をし、短髪の男はカーター。

「…………（＼＼＼＼＼）」

無言の彼は、ジャン、ニット帽をかぶつており、一度も外したところ見た事がないそうだ。ちなみに、FPSをすると人が変わるらしい…

「それで？一応理由を聞きましたよ。」

茶髪に眼鏡で丁寧な口調のおつさん（今年35歳）はアロン。似非紳士だ。

「カーターの言つとおり、ヒツの模擬戦をやるからそりぞり…だ
そうだ…」

そして、この金髪の男はアルフレッド、通称アル、ちなみにこのリーダーである。

「やつぱりですか…」

アロンは、少しだけ残念な顔をする。

そして、部屋の空気が重くなる。
するとアルが…

「ま、こいつ時は…呑みますか！」

そう言つて、どこからかウイスキーと人数分のグラスを出す。

「おお！太っ腹っすね！いつもは、安いカップ酒なのに…」

カーターは、嬉々として、そのグラスを受け取り、ウイスキーが注
がれると思いつきり破顔する。

「…………（^〇^）~」

ジャンは、声には出さないがうれしそうな顔をしている。

「いいのですか？勤務中ですよ？」

アロンは、そんな真面目な事を言つてはいるがしつかりとグラスを持
つている。

「細かい事は、気にするなよ～～」

「ここのしながら職務放棄宣言する、バ尔斯。

そして、全員にウイスキーが渡った。

「それでは、か　　『やあつと待つてやあつ』。『……なんだよ？』」

アルが乾杯しようとすると、アロンによつて遮りられる。

「やあついえば、今日、なんか初めて男が工事の動かしたそうですよ。」

アロンは、メガネを押し上げる。

「おおー、やあつは、すげになー、ドイツからもでないかな？」

「やうです。それを確かめるために、とりあえず今ドイツ軍では、工事を各部隊ごとに回していくんです。やあつはどこに回つてきただけですが、私は、全員試しましたので後は、アルだけです。」

アロンが長々と説明をしてくると、カーテーが工事を何故か、かつてくる。

「ふーん…（あいつらは、ダメだったのか…）それじゃ、試してみるかー！」

アルが工事に触るとキヤンと、甲高い音を上げて、起動する。

「……………ひ、とつあえず、上工事報告を…」

「そ、そうっすね。」

「……（+ー+）」

「さ、さすが～」

「……mjk」

いち早く石化の解けたアロンが上に電話をかけるが、他の人たちちは、皆動搖している。

そして、当人であるアルは…

「……（ゑ？俺、どうなんの？）」

泣いていた。

アロンが、上の人々に電話をして数分後、上の人3人が
あわただしく駆けこんできた。

もちろん、ウイスキーは処分済みだ。胃の中に…

「……（酒臭い…）んん！」

「――――（ビクッ！（バレタ！？）」――――

「？…アルフレッド＝バウムガルト少尉」

高級軍人の一人がアルのフルネームと階級を言つ。

「は、はい！」

緊張したアルは、声が裏返っている。

「……貴官は、本当にHISを起動できるのか?」

さつきとは違う高級軍人がアルに疑問を抱く。

「出来ます。」

「では、実演したまえ。」

ちょび髭が似合う高級軍人が、偉そうに命令する。実際に偉いのだから当たり前と言えば当たり前だが。

「はい（なんで、こいつらこんなに息あつてるの?）

嫌な顔一つせず、HISの起動を始める。キイイン、先ほどと同じ様に起動する。

「おお！ 我がドイツでも…！」

高級軍人が感嘆の声を漏らす。

「……よしーそれでは、貴官には本日付で黒ウサギ隊ショバルツェア・ハーゼに異動を命ずるー」

ちょび髭の高級軍人がまたもや、偉そうに命令する。

「はー…」

アルは、この特別技術課には特別な思い入れがあり、今さらの異動は、かなり堪えるようだ。

その後、アルは一階級特進し、大尉となり黒ウサギ隊に異動していった。

特別技術課のメンバーは…

「行つてしましましたね。」

「そうですね。」

「…………（トーツ）」

「なんか、寂しいですね~」

感傷に浸つていたら…

ひょこつと、高級軍人が顔を出している。

「…………（ 〇 〇 ）／＼！」

それに気付いたジャンが驚きのあまり、座っていた椅子から転がり落ちた。

「ジャン…どうしたんつすか？」

カーターが、ジャンを起こすとジャンは、高級軍人の方を指さす。

「へ、うお…、びっくりしたつす。」

「…無礼だね、君たちは…」

高級軍人の額には、青筋が出ている。

「申し訳ありません。

似非紳士が謝るが、依然として高級軍人の額の青筋は消えない。

「まあ、いいだろう。

君達4人もバウムガルト大尉と共に、黒ウサギ隊に異動だ。
大尉の強力な脅し 推しによつて君たちの異動が決まった。」

高級軍人は説明するにつれて、どんどん顔が青くなつて行くことから
アルが、どんな脅迫したかを考えると身震いする。

「そういうことだから、今日中に異動しつゝよつて、では。」

そう言い残し、去つていく高級軍人。

「「「「…………」」」

そして、4人は無言のまま荷物をまとめて黒ウサギ隊に向かつた。

4人は、確かに感じていた、次の日は波乱の一日になると…

プロローグ（後書き）

感想待っています。

タイトルは、仮なので良いのがあつたら教えてください。

次は、専用機が公開されると思います。

第1話～ク、ク、クラコッサ（クラクナムのじと風）～（前書き）

タイトルは、氣にしない方向で…

専用機公開は、次回で…

第1話～ク、ク、クラッサ（ドコランドの元風～）～

アルが、黒ウサギ隊の部屋の前に立ち、ドアをノックし、名前を告げると
中から黒ウサギ隊の一人だと思われる眼帯を付けた隊員が出迎えて、
副隊長の所に案内すると言い出す。

「あなたが、アルフレッド＝バウムガルト大尉ですか？」

「はい。そうです。（皆、眼帯付けてんな）、俺も付けるのかな…？」

アルは、興味深そうにその眼帯を眺めてくる。
だが、それは見られる側からすると、ずっと見つめられている様な
気分になる。

「…では、いらっしゃ（な、何？何で、ずっと）見てるの？」

「（ま、いいや。）」

そして、田を離す。

「…（何なの？ホントに…）」

見てただけで、過剰反応ではないか？と思つかもしれないが、
ずっと女子しかいない環境にいたのだ、多少は、仕方ないと「うも
のだ。

セーフリーハウスの内に、副隊長の居るところの部屋に着いた。

「……」やがてお待ちしています。では、これで。（はあ……何か疲れ
た……）

「はいはーい

そんな隊員Aの気持なんぞ、露知らずアルは、飄々としている。

「（副隊長か……ファーストコンタクトは、大事だからな……よしー）

今さつき、最悪のファーストコンタクトを取ったことに全く気付く
ことなく
意気込みながら、応接室と書かれた部屋のドアをノックしようと
すると……

ガチャ、ドアがアルの方に開いた。

「へブツー

ドアにはじかれ、地面にヘッドスライディングする。

「おや？これは、失敬。遅いので、迎えに行こうとしたのだが……來
ていたか。」

中から出てきたのは、アルのタイプ、ドストライクのクラリッサだ
った。

「……（やばいぞー、これは、やばい……タイプだ……）

「?.どうした？」

アルの熱烈な視線に気づき、手を差し出す。

「あ、どうも。」

手を取る。

「（あ、手すべすべだ。）」

起き上がるごと、当然手を離される。

「あ……」

「?.（何だ？何で悲しそうな顔をするんだ？
そういうえば、こないだ読んだ漫画と展開が似ているな…）大丈夫か
？」

「え、ええ！大丈夫です。申し遅れました。

アルフレッド＝バウムガルト小僧 じゃなかつた、大尉です。」

今さらながらに、挨拶をする。

「ああ、クラリッサ＝ハルフォーフ大尉だ。
同じ大尉だな、よろしく頼む。」

そつ言つて、握手するために手を差し出す。

「はい。」

アルは、その手を握った。
真面目な顔で

「（うはー手奇麗だなー）

いや、違った。ポーカーフェイスだった。

「今、隊長は不在だからな、私があいさつをした。
それでは、早速で悪いが…専用機についてだが…
武装については、自分で作るという事でいいのだな？」

「はい、構いません、むしろそうして下さい。」

「了解だ、では、明日の朝に格納庫にへ来てくれ、その時に工事を
渡す、では。」

クラリッサは、足早に立ち去つて行く。

アルは、その後ろ姿を見ながら、ニヤケ…微笑んでいたら

「あ～アルさんだ～」

後ろから、バルトの声がする。

「……（^_^）～

「おや、こんなところで何をしているんです？

「なんか、ニヤけてないっすか？」

「どうやら、特別技術課の面々が来たようだ。」

「やつと、来たか！ 実はな……あ、やっぱ、何もない。」

歯切れの悪さに、疑問符を浮かべる4人。

「どうしたんっすか？」

「うしくないですな？」

「…………（・・・・）」

「何があつた～？」

「いや、何も、それよつと、明日HISのコアが一回りへんな。」

「いや、アルから爆弾が投下される。」

「ホントっすか？」

「じゃあ、溜まつに溜まつたミサイルのテストが……」

「へ（^○^）へ」

「これで、年が越せるつてものですね。」

「ああ、年が越せるかどうかは、知らんが、

HISのテストと偽つてミサイルのテストが出来るのは確かだな。」

アル達は、ミサイル、ミサイル言つてゐる。

そして、その後、第458回ミサイル談義が始まり、オールナイト
した5人だった。

第1話～ク、ク、クラコッサ（ドコラシテの元風土）～（後書き）

気付いたでしょうか？

作者は、ミサイルが大好きです！

だから、専用機は…

第2話（前書き）

タイトル、思いつかない。

次の日の朝、アルは、クラリッサの部屋ヒューリックへ格納庫へ来た。 目の下には、隈が出来ていた。

「（あ、～昨日は、オールした拳句、ワイン一瓶空けたからな… 一日酔いだ…うふ…藥飲も…）」

そして、内ポケットに手を突つ込むと、瓶を取り出す。

「（ホントに効くのか、これ…）」

その薬とは、特別技術課は、各分野の変態からアンドナインテイクス選出されており、その中でも医療系も結構マッチてるアロンが、特別に作った

『一日酔いには、これ！キヤベジ ロココ』といつ薬である。

効用は、一日酔いが一発で治る。眠気などの副作用等は、一切なし、使用制限もなし！

ところが、酒に弱いサラリーマン達の味方なのだ。

パキ、クルクル、パカ、ゴブゴブ

ドリンクタイプなので、飲みやすい。ちなみに、イチゴ味。 激まず

「…（なんだ…これ…？）」

アルに衝撃が走る。

「「つおええええ…!…まつづ…!…!」

腹の中の物をすべて吐き出し、すつきつしたアルだった。

そう、この薬は、激まずすきてはかずには、居られないのだ。
開発者は、こう語つてゐる。

「一日酔いとは、はけば治るのでしょうか?
でしたら、全部吐いてしまえば問題ないでしう?私は、アルコール分解能力が非常に強いので
必要ありませんが…」

つまり、いつこいつことだ。

腹の中からなげ出るものねーだろ?つと

「(ま、まへある程度予測できただが…マジか…けど、
これですつきりした…もつ一生使わないけど…)

心なしか、顔色が随分良くなつた。

すぐに嘔吐物をかたずけ、きれいにし、ファブリーを掛けておく。

「(いれでよしー)」

その後、2・3分待つとクラリッサがやつてきた。

「…おはよつりだります、姉さん。」

「おはよー、姉さん？」

「はー、姉さん。」

「まあ、いいだろ？（姉さん…同じ年なのだがな…）」

多少の疑問を抱えながらも、認める。

「さつそくだが、これが、貴重の専用ヒジだ。名前は、無い、勝手に決めてくれ。」

そして、HISのある扉を開く。

「おおーあ、それと、自分の事は、アルと呼んでください。」

「…………わかった、ではアル、武装を入れといてくれ。終わったら見せてくれ、では。」

そう言つて、去つていく。

「せこせーー」

嬉しそうな顔で顔つと、ヒヒヒヒ笑つ。

「…（何だ？何であんなにうれしそうなんだ…まあ、いつか。昨日、日本から輸入した同人誌、まだ読んでなかつたな…読んどくか…）」

アルの事をすこしだけ、気に掛けるとすぐ、他の事に気を移す。

アルには、あまり興味がないようだ。

クラリッサがさり、アル一人になつた格納庫で…

「よし、じゃあ武装を載せるか…」

5分後、とてもはやく終わった。

「それじゃ、アリーナに移すかな…」

クラリッサに連絡するのをすっかり忘れ、早速テストを始めようと/orする。

「おっと、その前に…」

携帯端末を取り出ると、一斉メールを例の4人に送る。

♪♪♪

「これで、よし。」

「なんかあつたんすか？」
すると、10分もすると全員が集まつた。

「…(^○^)／」

「なにするの〜？」

「まさか、ミサイルのテストですか？」

4人の息は、相変わらずあつている。

「ああ、今からいろいろなミサイルのテストを行つ。」

アルのその一言で、4人は騒ぎ出す。

「ほいじゃ、先行つてるな。」

そう言つて、ISを展開し飛ぼうとする。

「ちょ、ちょっとまつて〜！」

バルトがアルを止めた。

「ん? 何だ?」

「なんで、IS展開してんつすか?」

「(・・?)

二人とも疑問を持っているようだ、何故か、アロンだけが、知つて
るよみたいな顔をしていたのが
むかついたので、あとで制裁を加えるとする。

「ああ、それはな なんだ。」

「…なるほど… 最高ですね！」

「／＼（^○^）／＼

「それは、すごいね～」

「まあ、予想していましたが…（ホントにするとほ…）HSの武装がミサイルだけ…」

そして、HSを展開し飛んで行こうとするが、今度は、クラリッサが入ってきた。

「（私とした事が、漫画を忘れるなんて…）すまない、忘れ物を貴官は何をしている。」

入ってきた瞬間に、アル、バルト、ジャン、カーターは物陰に隠れ、クラリッサをのぞめたが、生贊にされた、アロンだけがクラリッサに見つかる。

「…アルに言われて…（クッ、私を生贊にするとは…）」

アロンは、冷や汗をかきまくっている。

「アルに…？彼は…」

クラリッサは、部屋全体を見回すとアルの金髪が見えている。

「…いたな…バウムガルト大尉！」

「アルとよんぐだわい、姉さん。」

アルは、思わず飛び出してしまつ。

「…武裝が入つたら、見せるとこつたはずだが…」

「…あ、ああ、すいませんでした。次からは、氣をつきますので…
今日の所は、これで…」

ススッとアルは、クラリッサに何かを渡す。

「…な、こ、これは…」

すると、クラリッサの顔が驚愕の色に染まる。

「いいだろ？、では、武裝のデータだけを渡してくれ。」

「はい、すぐ！」（計画通り…）

そして、アルはメモリーにデータを入れ、クラリッサに渡す。

「つむ、ではな。同志よ…」

がつちりと握手し、クラリッサは、帰つて行く。

「はい…（ああ、手、柔らかかったな…ん？同志？…まあ、いつか。
）」

クラリッサが帰つて行くと、例の4人が集結する。

「なに渡したの…？」

「…（・。・。・。）

「すゞいっすね！」

「それより、貴方たち、私を囮に使いましたね…？」

「人だけ、観点がずれているが全員気にしない。

「フフ、あの人は、最近流行りの腐女子といつ人種だと、聞いたのでな。

あの人ガ、欲しがるような、本を渡したのだ。
それより、許可も下りたし、テストするぞ！」

「やつた～

「はやくやつましょ、つー。」

「準備OKです。」

「…（^○^）～

4人から、そう告げられるとアルは、EISを展開しアリーナへ飛んで行つた。

第2話（後書き）

おひつてしましました。
すいません。

専用機の設定を次に載せます。

機体設定（前書き）

機体設定です。

一応、見て行って下さい。

機体設定

黒い焰ショーバルツェア・フレーム

ドイツで発見された、二人目の男性IS操縦者の専用機として開発された機体。

初期型AICを搭載しており、それなりに高性能。拡張領域は、ミサイルで埋め尽くされているため

他の武装を載せる事は、出来ないのが、欠点と言えば欠点。

武装：

8連ミサイルポッド×2

この機体の主武装といつよりこれしかない。

ミサイル好きの変態によって作り出された武装。

IS用サバイバルナイフ×2

近接武器を載せるとアルが上からつるさく言われたので、しぶしぶ載せた武装、使う気はないらしい。

特殊ミサイル

ミサイル好きな特別技術課のもとで開発され、テストが延期され続けていた

超ハイスペックミサイル、いろいろある。現在確認できるのは、138機。これからも増えると思われる。

初期型AIC

ラウラの黒い雨シユバルヅエア・レーベンに載せられている

AICの初期型。

拘束能力が弱い。その上、最新のAICより、集中力を要するのでアルの様な、頭脳がないと若干きついかも…という感じ。

機体設定（後書き）

ミサイルが好きなもので…

第3話（前書き）

今回は、微妙です…作者としても

アルが、アリーナに飛び出すと、IRSにアロンから通信が入る。

『アル？ とりあえず、今日は、IRSの拡張領域に入っている二つのミサイルのテストをします。』

「ああ、わかった。」

そして、アルが拡張領域を確認すると、試作ミサイルが一つ入っていた。それを呼び出していた、ミサイルポッドに装填する。

『それでは、適当に何か出しますので、撃ち落としてください。』

アロンが、そう言つたがアルは、ほとんどIRSに乗つた経験がない。いきなり、そんな動く敵にミサイルをぶつけるなど、不可能なのだ。

「は？ いや、ムリだろ？」

案の定、不可能だと告げるが、アロンはそんな事を気にするそぶりもない。

『できますよ、そろそろテストを始めたいんですが…』

「…お前が、なんか怒つてないか？」

アロンの言葉から、怒りを感じ取ったアルは、疑問を投げかける。

『これ、全く。貴方達が私を囮に助かるつなんでしたのなんて全く、これっぽちも、小指の垢ほど気にしてませんよー。』

「ぬりゅ、氣にしてるー！」怒りこむ。

『H A H A H A、K I N H S U R U N Aー。』

アロンが、手元にあつたボタンを押すとアルの眼の前にある、扉が開き中から、おどろじて怪物が出てきた

「グオオオオオオーーーー！」

雄たけびを上げて、牙をむき出しにして、今にもアルへ飛びかかるうとしている。

「…ぬ？あれ倒すの？」

アルの顔が青を通りこして、紫色になり、おどおどしている。

「…むう（）うしても埒が明かないな…と、とつあえぎ…」

覚悟を決め、サバイバルナイフをその怪物に分投げる。

ISの補助を受けているため、とんでもないスピードで飛んでいるが怪物は、でこパンで弾き飛ばした。

「フンー…グルルルー！」

「（無理、無理無理無理、）こつは駄目だ…）

アルの脳内では、デフォルメアル達がアラートを鳴らし続けている。

「ガオオオオオオオ！」

ついに、怪物がアルに飛びかかつた。

アルは、絶叫しながらニサイルを打ち出す。

ズボンズボン

ミサイルポッドから、ミサイルが飛び出す。
そして、怪物がミサイルを避けるが、クネつと曲がり追尾し着弾する。

ドガーン

怪物は、戦闘不能となつた。

：威力高！？

そう、とてもビッグな怪物を数発のミサイルで仕留めるのだから、
そのミサイルの
威力の高さが伺われる。

『ええ、今のが追尾型次世代ミサイルの試作機です。』

「せうせいかつぱん! サイドはいいな、最高だ! どんどん行くぞ!」

『ええ！』

そして、この暴走した5人を止める事の出来る人間が居なく、テストは、夜まで続いた。

「うつーつ、疲れた…もう、無理だ。」

「さ、流石につかれましたね。」

— (- . -) : . . .

「もうダメ

限界です。

5人は、ようやく暴走を止めた。

すると、タイミングを見計らつていたかのように、クラリッサが入ってきた。

「失礼する。」

その瞬間、アルの顔から疲れが吹っ飛び、むしろ、艶が見える。

「何ですか？ 姉さん？」

「おお、同志よ……今は、彼らに用事があるのだが……疲れている
ようだから
伝えてくれないか？」

「いいですよ。（姉さんの頼みならたとえ火の中…は遠慮したいな。
）（

「では、彼らの正式な配属先が決まった。
黒ウサギ隊特別技術課、が彼らの新しい配属先だ。明日からは、そ
う名乗る様に…

「う、伝えといてくれ。最後に、貴官は普通の黒ウサギ隊だからな。
」

「わかりました。姉さん。お疲れ様です。」

「ああ、それでは。明日以降また語ろうではないか。日本の文化に
ついて！では、明日朝に本部に来てくれ
隊長からのあいさつなどを行う。」

クラリッサの眼は、輝いているように見える。

「え、ええ！」

「それでは。」

そう言って、今度こそ去っていく。

アルは、配属先に事をを4人に伝えると、部屋に一人帰つて行く。

理由は、簡単。

クラリッサに話を合わせるために、少女漫画及び同人誌等を覚えるためだ。

「（よし…勉強するかな！）」

合格と書かれた鉢巻きを締め、漫画を読み始めた。

結局、その日もオールナイトしたアルでした。

第3話（後書き）

「これで、アルがどんどん変態となつていくんだね」つい
思つて、田から汗が…（笑）

第4話（前書き）

何書きたかったんだか、途中から忘れてしまったので
何時も以上によみにくくこと思いますが…どうぞ。

アル達、特別技術課の面々がミサイルのテストをした、次の日…

アルは、胃をキリキリさせながら、黒ウサギ隊の本部をつらつらといた。

ちなみに、黒ウサギ隊は、ほとんどが女性で構成されているので男のアルは、結構珍しいものとなる。

ましてや、その珍しいものが一人で居るのならば、注目を浴びないわけがない。

「（…うう、姉さんどこだよ…）」

アルは、涙目になりながらも、しっかりとクラリッサを探している。だが、今回はクラリッサではなく、ラウラを探すべきだということを忘れていた。

「（…ホントに元気…？）」

その後も、やまよい続けた結果、クラリッサを見つけることは、できなかつた。

この時すでに、クラリッサに指定された時間は、とっくに過ぎていた。

「（…やつべ、時間過ぎてるよ…）」

すると、つにに隊員の一人が話しかけた。

その話になると、クラコッサは、口の口非番で、休みの様だ。

「…マジで…」

「マジです。」

「じゃあ、どう行けば？」

「隊長の執務室に向かえば問題ないと思っています。それでは。」

その隊員は、淡々と話し終わると、颯爽と去っていく。

「ハア…姉さんいないのか…」

アルは、田に見えるほど落ち込んでいる。分かりやすく言つと、財布から福沢諭吉が一人旅立つて行つた感じだ。

「（まあ、すっぽかすのは、不味いな…）…鬱だ。」

鬱になりながらも、しっかりと向かう。

5分後、多少さよないながらも、隊長執務室とかかれたプレートが掛かっている、ドアをノックしようとすると、

ガチャ、ドアがアルの方へ開いた。

「へブツー（これは、姉さんの時と同じ…）」

ドサ、アルは、地面に向かって垂直に落ちる。そして、そこに追い打ちをかけるかのように、小柄な少女がアルの

上に乗る。

「む？ 貴様は…？」

小柄な少女は、アルをよく見ると、黒ウサギ隊の制服を男様にカスタマイズした物を着ている。

「…（そうか、こいつが…）遅いぞ！ 30分も遅刻しているではないか！？」

「こっちから迎えに行きそうになつたぞ。」

小柄な少女にそう言われて、カチンと来ないほどアルは、大人ではない。

いや、年齢的には大人なのだが、如何せん精神年齢がえ？ なにこれ？ 実年齢の1／3なんだけど？ のであるから…

「（な、なんだ？ このガキ？）何すんだこのガキ！」

「こつなる。

「な！？ ガキだと！？ 貴様、上官に向かつてそんな口を聞いて…！」

「上官…！ こんなみみつちいガキが、上官な訳ないだろ？ が…！」

「みみつちい！？ 貴様… 一度痛い目にあわないとわからんらしいな…！」

そして、小柄な少女がファイティングポジションになる。

「… ふつ… お前みたいなガキに倒されるわけないだろ？ … ふふ…」

アルは、この小柄な少女に負けるわけがないと言い張る。それもそ
うだ。

この少女の身長は、150センチ程度。

一方、アルは180センチ近くある。

これだけの体格差では、普通なにもできないに決まっている。だが…

「フツ、後悔するなよ。」

そういうと、アルの手をがつちりつかみ、ブン、と背負い投げの要領で投げ飛ばす。

アサ、本田、一度田の地面への垂直落トある。

「…（せつあれたか…へこせ、いねへりこでわらひじこ二二のだ。う
む。）」

ほんの少しだけ後悔する少女だったが、ホントに一瞬だった。

「い、イテテ（いや、まじか？焦つた、ケンカとか初めてなんだよね……）

「い、イテテ（いや、まじか？焦つた、ケンカとか初めてなんだよ
のか？最近のガキンチョは！）」

「い、イテテ（いや、まじか？焦つた、ケンカとか初めてなんだよ
のか？最近のガキンチョは！）」

「これでわかつただらつ? (何をわからせようとしたのか、忘れた
が……)」

「…ちつ、わかつたよ。あんただれだよ？（おおーひせい）もりの弱り切った腰には、きつい…」

「（舌打ち…とじとん失礼な奴だな…）ラウラ＝ボーデビッヒだ。ちなみにここの隊長だ。」

そう告げると、アルはバツの悪そうな顔をして謝罪する。

「すいません。失礼な事を言つて。（隊長だもんな、めちや強いわ…怖いわ～怖いわ～）

自分は、アルフレッド＝バウムガルトです。」

「ああ、別に良い、これからもよろしく頼む。（なんだ、普通のやつか…よかつた）

早速だが、少し伝えたい事があるのだ。」

通信ではなく、直接言い渡したいといつ事は、結構重要なことなのだろう。

「ええ、構いません。」

「そうか、では、伝えるぞ。まずは、

今、貴官が男ながらに口を動かせるといつ事は、隠ぺいされている。」

「ええ、わかっています。（確かに、混乱を防ぐためとか言つてたな…）

「そこでだ、IIS学園から要請があつた。優秀な技術者が5人ほどほしいと…」

「…くえ、随分とピンポイントな要請ですね。」

「ああ、まるで見計らっているかの様だが、そこはいい。我らドイツでは、貴官と特別技術課の5人を派遣することになった。ついでに貴官の公表もする。」

ラウラから告げられる、短期間での異動命令。アルは、断る事を考えたが、

先読みされていたかのように、ラウラがその考えを断ち切る。
「ちなみに、拒否権はない。命令だし。何よりも学園には、報告してある。」

「…はい。了解です。皆には、そう伝えておきます。」

「ああ、頼む。私も学園に編入が決まっているから、その時に一緒に行こう。」

「わかりました、伝えておきます。」

「頼んだ。それでは。」

そう言って、去つていいくらラウラを虚ろな目で見ながら、アル自身も特別技術課に向かい、全員に事情を話した。

「…また異動つすか?」

「よつやく、腰を落ち着けるといひが出来たところの…」

「……（^_ ^）」

「……はあ、鬱だ～」

反応は、各自違つたが、共通して落ち込んでいるのは分かる。

「わりい、じやあ、しばらくしたら行くからな。準備しておいてくれ。

（…ああ、姐さん成分が足りなくなってきたな…）」

「わかりましたよ。」

「了解～」

「…（+○+）」

「…ジヤン…どんな顔してんつすか？」

アルは、一応全員が了解の意を示したところで、部屋に帰り対クラリツサ用の漫画を読み始めた。

すると、アルの携帯端末にクラリツサから、メールが来た。

「？…（誰だ…！姐さんではないか！…なになに？…明日、夜7時

に私の部屋に来てくれって…え？、なんで？まあ、いいや。その時は、

姐さんと

二人つきりだあ～）フハハハツハハハハハ、ゲ、ゲホゲホ。」

わかりましたと返信したのち、テンションMAXになつたアルは、

やの口、すこし筋幅を上げていたやうだ。

第4話（後書き）

「うまく、書けなかつたな…すいません。」

最近、主人公が天然鈍感という小説が多くて（自分も書きますが）食傷気味なので、今回は、ヒロインが鈍感と言つことでお気に召さないのならすいません。
元のコンセプトがこれだもので…

それでは、次回の更新で。

第5話（前書き）

こつもの話の話です。

アルが、クラリッサからのメールに舞い上がった次の日、朝は、普通に仕事へ向かった。

「（夜は、姉さんと一緒にやべ、今から、緊張しちまつ……）」

アルは、昨日からずっとニヤついていて、道行く人が気持ち悪い物を見る目で見ていた。

それも、恋する乙女ではなく、恋する男には関係ない。

「（うはー あれ？ 今からどこ行くんだっけ？）」

すると、前方300メートルにクラリッサの姿があった。

「（姉さんレーダーに反応が…？）」

「ユータイ の様にピキーンと来たアル。

「今行きます！」

そして、クラリッサの方へ駆け出していた。

「ねえやーん！」

「む？ アルか？」

クラリッサは、ズドズドと砂ぼこりを上げながら、走ってくるアルに

田を丸くしながら、突進してくるアルを冷静に避ける。その結果、アルは壁に激突した。

「グ…（や、流石姐さん。…）」

「やうだ、アル。」

何かを思い出したかのように、クラリッサはアルを呼ぶ。

「なんですか？姐さん。」

「今日は、アルと昨日会ったと思つが、隊長の模擬戦をするらしいから、とつあえず、隊長の執務室に向かつてくれ。」

「わかりました、姐さん。それでは。」

「いや、私も隊長の執務室に用がある。一緒に行こう。」

クラリッサからすると、ただ一緒に行くだけの話だが、アルにとつてそれは、とても魅力的な誘いだ。

「えー？はーー（はーー今日は、なんて良い日なんだー。）」

「では、向かうとするか。（それにしても、なんであんなにうれしそうなのだ？）」

数分後、アルとクラリッサはラウラの執務室に到着した。

「（ああ、この数分がとても短く感じる。ん？じゃあ、姐さんと行

動したら、

どこへ行くのも、短くかんじるのか？…まあ、いいや）「

ノックし、中に入るトワウラが普通にスクワードをしていた。とても集中しているようで、アルとクラリッサが入ってきたことに気付いていないようだ。

「隊長。」

そこで、クラリッサがラウラに近づき、声をかける。

「ん？ああ、クラリッサか。すまん気がつかなかつた。…？なんだ、アルフレッドも一緒か…」

「ええ、そろそろ模擬戦の時刻です。それと、例の件について話がまとまつたそうです。」

最後の方は、アルにも聞こえない様に小声で喋る。

「さうか、もう模擬戦の時間か…その事は、また後で…」

初めの方は、わざと大きな声で話し、最後の言葉を隠す。だが、アルには通用しなかつた。

「（例の件ってなんだ？…後で聞いてみるか。それにしてもこんなところで

役に立つとはな…カーターの発明品。）「

その電子機器の発明にマッジでる、カーターの発明品とは、

『これがあれば、気になるあの子の話もまるわかりー盗聴器ー』

である。

細かい事を言つと、盗聴器ではないのだが似たようなものなので、
そう呼んでいる。

具体的にどのような物かと言つと、耳にワイヤレスイヤホンと
アルが今、手に持つている音を拾つ機械である。
機械で、座標を正確に入力しなくてはならないので、使いづらいが、
その
性能は、無駄に高い。

いわば、性質の悪い悪戯道具つと言つたところだ。

「（ホント、あこづらの発明つてビビで役に立つかわからないな…
うんうん）」

アルが、そんな事を考えながら、感心しているとラウラが呼びよせ
る。

「おい、はやく行くぞ、豚。」

何故か、毒舌ラウラ。

「豚！？誰が豚だ、このマジンゴーー！」

ラウラに意固地になつて言い返すアル。

「なー？人のコンプレックスを…」

「はいはい、アリーナへ行きますよ。」

ケンカになりかける、二人をクラリッサが宥める。

二人は、渋々クラリッサに従い、アリーナへ向かう。

その道中にも、アルとラウラは何度か、ケンカになりかけ、そのたびに

クラリッサが、宥めるというスタイルが出来上がっていた。

そして、アリーナに着くとラウラがアルに話しかける。

「アルフレッド」

「何？」

「…お前も、黒ウサギ隊のはしぐれなのだから、眼帯を付けなくてはならないのだが、今、ちょうど眼帯が切れている、IS学園に行くまでに用意するから待っていてくれ。」

「わかつたよ。」

ラウラとアルは、お互いに喋つたら、ケンカになると学んだらしく、必要最低限の事しか話さなくなつた。

「ああ、その事ですが、私の前使っていた奴がありますので、渡しますようか？」

クラリッサが、ラウラに提案したのだが、真っ先にアルが食い付いた。

「なんですよー?是非、お願ひしますーー!」

「あ、ああでは、また後でな。」

「はいー。」

アルとクラリッサの会話が終わると、ラウラが不機嫌そうになつている。

「…(なんで、アルフレッドの対応は私とクラリッサとは違うのだ…)

どうやら、すこし嫉妬しているようだ。

その後、アリーナへ移動し模擬戦を行つた。

結果は、ラウラのぼろ勝ちのぼろ勝ち。
アルのミサイルは、ラウラのAICOに止められ、レールカノンの餌食になるの無限ループをしたようだ。

「今日は、こんなぐらいにするか…
(ここつ、戦略のなにもないぞ…ミサイルしかつてこないではな
いか)」

「ああ、…もう、限界だ。」

アルは、そう言って地べたに寝転がる。

ラウラは、その姿を見て、手を差し出そうとするが、どこからか特別技術課の4人が出でくる。

「あれ～？、こんなところに寝転がって何してるんですか～？」

「…（^—^）／＼

「いいデータがとれたんつすよ。」

「それより、新しい薬『これを飲めば、疲れも一発でとれます！』M A I N『がありますが いりますか？』

実は、この5人ずつとアルを見ていたのだ。

「あれ？お前、どうしてここに？」

アルは、立ち上がり4人と一緒にどこかへ向かう。

「たまたまですよ。」

カーターが、白々しくそう言つ。

「（何を言つ、ずっと陰から見ていただらう…）

ラウラは、それを聞きながら自分の思考に没する。

「なんだよ、待つていてくれたのかと思つたじやんか？」

「（ちやんと、見守っていたのだがな… それにしても、私も、待つていてくれるような、仲間ができるのだうか…）

遠くから見守つていてるとクラッセサが、話しかけた。

「隊長、お疲れさまでした。」

タオルとドリンクを差し出す。

「ああ、ありがとう。」

今まで、ラウラから礼の言葉を言われた事がなかつた、クラリッサは面喰つた顔をするが、大声で喋るアル達を見て、納得した顔をする。

「いえ、（アル達は、いい影響を『えたようだな…』）

「では、仕事の話とするか。（まずは、近い人間からだな。）」

「ええ、では…ファンタムタスク亡国企業がイギリスの最新鋭機を狙つたそうです。」

クラリッサから、もう告げられたとラウラは苦しそうな顔をする。

「ついてに動き出したか…対策を練らなくてはな…エリ学園に向かう前に対策を考えるとあるが、では、明日対策会議を行つ。各隊員を集めといてくれ。」

「了解しました。では。」

そう言つて、クラリッサは去つていく。

「（むへもうすぐ7時だな…戻つておへか…）」

場所は、変わつてクラロッサの部屋の前

そこには、アルが来ていた。

「（ついに来たな？時、楽しみにしたけど、いざ来てみるとこわいな…）」

アルは、チキンなのだ。

「…（そうだ、いじつこうときはあれだ。アロンからもひつた薬を飲むわ。）」

懲りずにまた、アロンの薬を飲むアル。
その薬とは、

『緊張？なにそれ？これ飲めば問題ないんですか？』

である。

この薬？は、アルコール濃度が恐ろじぐらに高い。
一升瓶を開けても、全く酔わない人でも一口ドryptてしまふぐらうだ。

つまり、酔つて気を大きくしようとつ魂胆だ。

クイ

どこのからか取り出したグラスに注ぎ、一口飲む。

「（うおおお、今ならなんでもできる気がする……）」

気が大きくなつたアルは、クラリッサの部屋のドアをノックする。

すると、すぐにクラリッサが出てくる。

「来たか、では、入つてくれ。」

クラリッサは、アルを中に通す。
そして、気が大きくなっているアルが、クラリッサに告白する。

「付き合つて下さい、姉さん！」

「？いこぞ、どこにだ？」

「……買い物に。」

自分への好意には、鈍感なクラリッサは、付き合いつゝ= 買い物の不思議方程式があるようだ。

「まあ、それはおいおい決めるとして、今日来てもらったのは、分かるか？」

「いえ、わかりません？」

酔っぱらっているアルに疑問を持つが、すぐに消える。

「まあ、やつだな。まあ、一つ言えておくれ。

明日、ある事についての会議を行つ。第3会議室に特別技術課の面

共に来てくれ。」

「わかりました。」

驚異のアルコール分解能力で、酔いが分解された様でしつかり了解の意を示す。

「つむ、では、本題に入る。今日は寝かせないぞ。」

はたから聞いたたら、卑猥な感じにしか聞こえないが、もちろんそういう言った
意味ではない。

「アルは、どんな漫画等が好きなんだ？」

「こういう意味だ。

つまり、日本のサブカルチャーについて話したいのだ。
その事に気付いた、アルは若干がっかりする。

「（そういうことか…） 基本的になんでも読みますよ。」

「そうか！？ そうか。では…」

こんな感じに、オールナイトした、アルとクラリッサでした。

第5話（後書き）

長くなってしまったのでおひぎしました、すいません。

金曜日は、忙しいので更新できません。すいません。

謝つてばかりですいません。

それでは、明日更新します。
では、まだ。

第6話（前書き）

今回は、短めです。

次の日、アルはいつもよりジヤンの発明品、
『これ、絶対め覚めるよ、だつとうるさいもん。』

まあ、簡単に言うと、田覚まし時計なのだが
如何せん、音がうるさいのだ。異常なくらい。
わかりやすくいと、カラオケで音痴なくせに、熱唱する奴
をうるさいな…と思つの以上にうるさい。

だが、ワイヤレスイヤホンによつて、その使う本人にしか聞こえない
ので
周りには、安心だ。
である。

「（おおひ。やつぱうるさいな…まあ、一瞬で田、覚めたけど…）」

じんじんと痛む、耳を氣遣いながら、第3会議室へ向かう。

「（あー…そうだ。あいつら呼んで、第3会議室へ向かう。）」

途中で、方向転換し特別技術課の部屋に向かう。

ガチャ、ノックもせずに中に入ると、彼らはオールでFPSをやつた
直後だつたらしく、目が死んでいた。ジヤンを除いて…

後のジャンの横に居た、カーターによると、

「あいつは、ダメっす、ありえないっす。」

ガクブルしていた。

事情を聞くと、あきれたアルだったが…まあ、仕方ないかという感じになり

とりあえず、第3会議室に連行することにした。

「ほら、今日、大事な会議をするらしいぞ…」

それだけでは、動かない特別技術課。

「いやっすよ、メンディっす。隊長、ガンバッす。」

「今の状態で行けといつのですか?」

「無理だよ~」

「(^O^) ~」

いや、違った、ジャンだけはやる気だ…

「(仕方ない…) そりゃあ、
今日、1970年のワイン空けようと思つてたけど…あいつらは、
元気ないみたいだし
ジャン、二人で空けるか?」

最終手段に出たアル。特別技術課は、別名、酒豪達の巣窟とも言われており、そのくらい皆、酒が大好きだ。

つまり、酒で釣るのは最も効果的と言えるだろ？。

「元気ハツラツ～～！」

「ファイトーイツパーザツす！」

「チオ、ビタ…あれ？」

約一名合っていないが、皆元気が出たようだ。

「よし、皆元気だな。じゃあ第3会議室に行くか。」

だまされたつという3人を、アルとジャンは引きずりながら、第3会議室へ向かった。

途中、人でなしゃ天使の面した悪魔などと、罵声を浴びせ続けられたが、アルは気にしない。

結局最後は、無抵抗でついてきたので、何もなかつた。

第3会議室のドアをノックし、名を告げる。

「アルフレッド＝バウムガルトと特別技術課の4人です。」

「入れ。」

「失礼します。」

クラリッサからもじつた、眼帯を付け、何故かキリッとした顔をする、アル。

アロンが内弁慶めとかほざいていたので、アルはアンパン血を喰らわせ黙らせた。

「よし、時間通りだな。座つてくれ。」

クラリッサがアル達を催促する。

数分後、集まるべき人は全員集まり、会議が始まる。

「よし、では、会議を始める。クラリッサ。」

ラウラが、そう告げるとクラリッサが、言葉を受け取る。

「はい、今回の議題は、亡国企業（ファンタムタスク）についてです。」

アル達5人は、あまり聞いた事のない名前に首をかしげる。他の人たちとは、あ～あれね、的な顔をしているので分かつているのだろう。

わからないのは、アル達だけの様だ。

「亡国企業（ファンタムタスク）とは、第一次世界大戦時に成立した組織でほとんどが謎に包まれています。行動目的も一切不明なので、対策の取りようがありませんでしたが今回、イギリスがISを盗難、いえ、強奪されたことから、ISが必要だという事がわかつたのでここ、ドイツの我ら黒ウサギ隊は対抗策を練ることとなり、今回の会議の趣旨です。」

そこまでで、一端言葉を切る。そして、タメを作り嬉々とした声で

喋る。

「そこです。黒ウサギ隊には、情報のエキスパートが入ったではありますか。」

「彼です。アルフレッド大尉です。彼が、軍人になったのは、ハッキング技術が高いからに他ありません。」

だんだんと、某テレビショッピングのたか の様な喋り方になつて行くクラリッサに一抹の不安を覚えるアルだったが、さつきから口をはさめないでいる。

「なので、彼に亡国企業についての事を調べてもらい、後は、実動隊として我々が動けば、よいと思つのですが、どう、おもわれますか？」

最後に、ラウラの方を向き、荒い息をしながら、問つ。

「い、いいじゃないか！皆は、どうだ？」

当然、否定的な意見を述べる者などおらず、満場一致で決まった。アルの俺の意見は～～という魂の叫びは、全く聞こえていないようだった。

「よし、これで、会議を終える。アルフレッド大尉は頼むぞ。解散。

こうして、アルの仕事がまた一つ増えたのでした。

「

第6話（後書き）

ちなみに、今、HS学園では、一夏がセシリ亞にフラグ立てているところです。

はやく、HS学園に向かわせたい…

それでは、次は、明日です。連載3本抱えるのは、なかなかきつい

…

第7話（前書き）

あさひたなび、みんなへお願ひします。

次の日、HS学園ではちょうど、鈴が登場している頃、遠く離れた、ドイツの黒ウサギ隊の本部でアルが、ディスプレイとにらめっこしていると、急にドアが開かれた。

ガチャ

「（誰だ？ノックもなしに、アロンか？）誰ですか？」

どうやら、アルの中では、アロン＝不作法の法則が成り立っているようだ。

「あ、アルフレッド、日本へ行くぞ。準備をしろ。」

アルの予測？は、外れてアロンではなく、ラウラだった。

「は？ なんで？」

「HS学園に行くのだ。」

「はあ？ まだ、先の予定のはずだけど…」

アルがそう質問すると、ラウラの顔が引き締まり、真剣なものになる。

当然アルもそれに気付き、ただ事ではないと悟る。

「…わかった。特別技術課の監は？」

「了承済みだ。後はお前だけだ、早くしろノロマー。」

何故か、毒舌なラウラだが、このような口調で罵られたり、踏まれたりして

喜ぶ、俗に言ひマジ通称Mと呼ばれる性癖をアルは、持ち合わせていない。その上

精神年齢が、ラウラの実年齢より低い20代アルは、怒る。

「はあ？ なんで、俺がお前にノロマ呼ばれわざされなきやいけないんだ？」

そもそも、お前が昨日の内に言つとけばまだ、準備を出来たものを突然言つからだらうが！！

このちんちくりん！！！」

「なんだと！？ 貴様、そうとう私の靴の裏をなめたいりしこな…！」

「誰も、そんな事言つてないだろ？ お前の脳みそは、何ですか？ カニみそですか？」

おいしそうですね！？」

本当に、こいつら軍人と聞き返したくなるような低レベルの口喧嘩だが、アルの最後の一言で終わる。

アルの負けで…

「いの、【閲覧規制】」（とてもひびこ下ネタ。ラウラにとっては…）

「な、な、な、なにを言つているんだあああ…！」

アルのその言葉を聞くと同時にラウラが、アルに向かってドロップキック。

その体格差など、一切無視した非常なる蹴りがアルを抉る。アルは、そのまま吹っ飛んでいき、頭から壁につつこんだ。

「（ひょっとやつすぎたか…いや、そんな事はない。

さつきのは、最近流行りのS E C U R A R Aとか言う奴だろ

う…

でもまあ…）生きてるか？」

さつきのとは、【閲覧規制】のことを指しているのひつ。ラウラが、生死確認をすると、アルは不死鳥のことく復活する。

「大、じょ、うぶ…」

「いや、全く大丈夫そうには見えないが…」

「い、ころを飲めば…」

そう言つて取り出したのは、

『これを飲めば、どんな傷も一発で治る一マキロ 飲むタイプ!』

アロンが開発した、数少ない有能な薬である。

この薬は、おそろしいことにほんの5秒で重傷の傷も治つてしまつのだ。

ただ、使いすぎると、体内に耐性が作られてしまつので、3回が限界。

アルは、その貴重な1回を使おうとしているのだ、傷がそつとうな物だと容易に想像できる。

「ゴクリ、薬をのどに通すと衝撃がはしる。料理漫画でよくあつそつなあれだ。

「 ゴルゴ えい で ゃん づ あ ケ だ あ 」

謎の言葉を発しながらも、アルの体の傷はみるみる消えていく。現場に居たラウラは、言葉を失っていた。

「 すいませんでした。もひ口答えしません。どうか、ゆるしてください。」

傷が治るとすぐ、ラウラの前に来たと黙つと今度は、頭を下げあがめる。

「 うや、ラウラに口答えする氣は失せたようだ。ちなみにこれは同時に、アルとラウラの力関係が確定したものだった。」

元々、上位と部下の関係なんだだけね。

「 こや、じつうじつ悪かった。すまん。日本行きはやはつ見直すことにした。」

「 … いいんですか？ 重要な事があるんじや？」

最初の話では、それなりに重要な用事があるよつて聞いたことからの疑問だった。

「 ああ、実はな…」

その後のラウラの話をまとめるところだ。

クラリッサと日本の話をしていたら、日本の間違った知識を植え付けられ

すぐにも、日本へ行ってみたいと思ったためである。

それは、即ちラウラが腐女子になつた事を意味する。

それを聞いた、アルは…

「姐さん、あんたす」（隊長を自分色に染めちゃつたよ…でも、そんなところもいい！）

と、一人のろけながら、歩いていた為周りの人の視線が痛かったのだが、気が付いていないアルでした。

第7話（後書き）

特別技術課の薬つてベンリーだわ
つて思つてゐる作者です。

そういうば、今回、特別技術課の人たちでなかつたな
…

それでは、また。

第8話（前書き）

今回ばかりは、あんまり頼らなかつたかも…

ラウラとアルの力関係が、完全に決まってから早くも1週間が過ぎた。

そして、丁度この日は日本へ渡る日だった。

これまで、アルがエリに乗れるという事実は隠されてきたが、ついにこの日

ドイツで正式に発表される。

記者会見場には、多くの「シップ」記事を書く会社から、世界に向けて発表するためにはカメラまで用意されていた。

その舞台裏で、この記者会見の主役? のアルは、緊張でガクブルしていた。

「（や、やべーよ、ミスつたらどうしよう…緊張してきた…）

そうだ、アロンの薬は信用できないから、ジャンの薬を飲もう。）

そう思い立ち、魔法の懐からなにかの紙を取り出す。

「（これが？紙じゃないか…！何か書いてある。）

その紙には、

『人つて文字を手のひらに書いて呑みこむを、3回したら緊張が取れる…かも。』

と、書いてある。

「…それっておまじないじゃね？」

さうよく見ると、何かが書いてある。

『今、それっておまじないじゃね？とか思つた人つゝ「みの才能がないです。』

そう書いてあった。

「（つ、つこのみの才能…ない…）」

その言葉は、アルの心をブローケンするにせ、十分すぎたよつだ。だが、良くも悪くもこれで緊張が解けたようだ。

10分後、クラリッサが到着すると、〇一二状態だったアルは、復活する。

「おはよう。アル。緊張しているか？」

「おはよう。アル。緊張しているか？」

「いえ、微塵も。」

「おお、流石だな。心友よ。それでは、時間だ。会見場へ行くぞ。」

親友と言ひ部分で、アルの顔が赤くなるが、クラリッサは気付く様子もない。

「はい！／＼（し、心友だつて。！）」

「（なんで、顔を赤くするんだ？）」

そして、すぐに来たラウラと共に会見場へ行く。
すると、喧しいほどのカメラのフラッシュにアルは、顔をゆがませ
る。

それに動じることなく、ラウラとクラリッサが会見を進めていく、
ついに
アルの話になる。

「そして、此方の彼が今回の記者会見の一版の目玉の、世界で一人
目の
男性I.S操縦者です。」

そう言つた瞬間にフラッシュと会場のざわめきがピークに達した。
「紹介にあずかりました、男性I.S操縦者のアルフレッド＝バウム
ガルトです。

来週から、I.S学園に行く事になつています。それでは、私はこれ
で。」

そう言つて、アルが立ち去るとラウラ、クラリッサと続いて出て行
つた。

舞台裏では、アロン達特別技術課の4人が居た。

「上々でしたね。」

「あ、かつたですか～」

「…（>○>）～」

「さすがつすね。」

賛辞の数々をラウラは、切って落とす。

「いや、もつと頑張つてもらわなくては困る。
これからも、いつこつた会見がふえるだらうからな。
それは、せておき出発するぞ。準備は、出来てこいな?」

「出来てるよ。」

「よし、ではすぐ滑走路の所に来てくれ。」

「「「「「ま」」」（>○>）～」

それから、10分ほどで全員が集まり、黒ウサギ隊の専用ジェット
機にて

日本へ飛んで行った。

第8話（後書き）

とこり」とで、次回からは、新章になります。

ホント、今回なんだつたんだろう?と思っています。

まあ、これでやっと原作突入できるので
作者としても、うれしいです。

では、また明日。

第9話（前書き）

おっと、大分遅くなってしまいました。

今回飛ばしても、問題ないです。

記者会見の次の日、ラウラと特別技術課の5人は、無事、日本入りを果たそうとしていた。

自由快適空の旅の中では、もうカオスだった。

乗り物に弱い、カーターが酔ってしまい、そこにアロンの薬を投与したら、その薬は例のキヤベジ m k 2と間違えていて、カーターはリバース。

さらに、ジャン、バルト、共にもらいゲ をしてしまつという状況だったのだ。

なにはともあれ、なんとか無事に到着出来て一安心の6人だった。空港から、普通車で（下手にリムジン等で移動すると、目立つための処置）

しばらくの滞在先となる、ホテルに向かつた。

ちなみに、このホテルは、ドイツ軍が極秘に手配したもので、従業員たちも、理解のある人間である。

部屋に着くと、ラウラは、どこかへ行くつもりのようだ。

ちなみに部屋割は、ラウラだけが、一人部屋で後は、全員同じ部屋に割り当てられた。

「では、私は出掛けてくる。」

「いやいやいや、目立つ事は、ダメでしょ。それにその軍服で行くのか？」

荷物を置いてすぐ元へ、そのままの格好で出かけようとするアルを、アルは止める。

「…もう…では、どうすれば？」

「まず、服着替えろよ。」

「…」れど、学園の制服しか持っていないぞ。」

着替えを催促するアルだが、ラウラの爆弾発言に驚愕する。

「…え？いや、それマジ？」

「…なにか、不味いのか？」

それが、デフォのラウラにとって私服が無いのが、どれだけおそろしいかわかつていない。

「（編入するまで、制服を着させるわけにもいかないし、俺達は、男ものだしな…というよりサイズが…）じゃあ、編入してからならどこにでも行けるから、その時に…」

「…（もう…しかし、軍服で移動は確かに不味いか…はやくメイトに行きたいというのに…）

分かった、それまで待とう。」

なんとか、諦めてくれたラウラにアルは、ほっと息をつき、部屋に戻つていぐ。

「よし、じゃあ、俺達明日から、学園に来いつて言われてるから…失礼します。」

「ああ、ではな…」

部屋に戻ると、アロン達がなにやら深刻そうな顔をしている。

「どうした? (ああ、もづ、姉さん成分が足りなくなつてきた…鬱)

だ)」

「アル…これを。」

アロンがそう言つて差し出したのは、ノートパソコンだった。」

「どうしたんだ?」これが?」

至つて普通のそのパソコンになにがあるのか、わからないようだ。

「よく、みてくださいっす。」

カーターにそうせかされ、ノートを開く。すると、バコン

「くづ…」

一昔の漫画にあつた、あのパンチングマシーンが飛び出してきた。

「ひ、引っかかった~ ｗｗ」

「…（^—^）」

「…ふつー。」

「全く…間抜けですね…ふふ」

そうやら、アルの反応を見て楽しみたいよつだ。

「お、おまえらなあああーー！」

ふるふると、激昂し、枕を持つと思いつきり振りかぶり、手始めにアロンへ投げる。

「腸をぶちまけろーー！」

時速300キロの速さの枕が至近距離で投げられるが…

「当たらなければ、じつとこいつとはないー！」

そう言ひて、サッと躲し近くにあつた、枕を手に取りアルへ分投げる。

一人が、まくら投げをしているのを、横で見ながら、ワインを傾けるジャン、バルト、カーターでした。

ちなみに、まくら投げはその後、体力のない一人は、1分ほどで終わり、ワインを開けていた

3人と喧嘩が始まると、とても楽しかったよつだ。

第9話（後書き）

ホント、今回こいつませんね。

次回から、HS学園行きます。

では、また。

次の日、IS学園の校門前には、アル、アロン、カーター、バート、ジヤンの5人がミサイルについて語りながら、迎えを待っていた。

「いやね、俺はこう思つんだよ、俺、ミサイルあれば、なにもいらないって。」

「それについては、珍しく同意できますね。」

「いや、でもパイルバンカーも外せないですよ。」

「そうだね~」

「…(^○^)~」

こんな感じの話をしていると、二つの間にかヒートアップして、迎えに来ている

千冬さんに気付けなかつた。

「おい、」

「聞け!」

ようやく、アルが反応する。

千冬さんが、凄みを利かせて怒鳴るが、アル達には聞こえない。

「誰だよー。俺たちは、真剣にミサイルについて話しあつてゐるのー。邪魔するな。」

ブチッ！

千冬さんの血管の切れる音が聞こえると同時に、一夏が毎日のようにならつて喜んでいる

出席簿が火を吹く。

バシーン、バシーン、バシーン、バシーン、バッシューンーーー！

誰が、一番強く叩かれたのは言わずにも分かるだろ？、アルだ。

各々痛そうなポーズをとるが、一人だけ痛みにのたうちまわつている者がいる。アルだ。

「全く、お前達がドイツから來た、特殊例とそのお供か？」

「そうです。」

アルの確認が取れると、自己紹介をする。

「そうか、紹介が遅れたな、1年1組の担任、織斑千冬だ。」

「あ、どうも、アルフレッド＝バウムガルトです。よろしくお願ひします、ミス織斑。」

「アロン＝バッハマンです。」

「カーター＝ベルグヴァインっす。」

「バルト＝ビッテンフェルトです～」

「… ^ m (—) m ^」

「ああ、ここには、ジャン＝ブロムベルクです。」

声を出さない、ジャンにムツと千冬さんがなつたのをアルは、機敏にさつちしに

ジャンのフルネームを告げる。

「…つむ、では、バウムガルトには、私の補助として付いてきもらうが、

他の者は、特別に技術室が用意されている。そこに居てくれ。何もない時は、バウムガルトもそこにいる。」

「了解です。」

そう言って、アルと千冬さんは、去っていく。

残つた4人は、それを見送つたのち、配布されていた地図を頼りに、特別技術課へ向かつた。

アルと千冬さんが、向かつた先は職員室と書かれたプレートがある所だつた。

「え～と… なんでここに？」

「お前には、ここの情報の教師をやつてもうおつとこつことになつてこる。」

だからだ、ここがお前の「スクだ、好きにつかえ。汚くはするなよ。では、次の所へ行くぞ。」

「はい。（あれ？教師？聞いてないぞ。それより、ミス織斑の机魔窟じゃね？）」

顔には、出もないがとても失礼？なことを考えていたアルだつたが何故かしら、千冬さんにはバレ、本田一度田の出席簿の攻撃を受けた。

「今、失礼な事を考えていたな？」

「い、いえ。滅相もござりません！（え、エスパー？エスパー織斑（笑））」

「…やうか…」

全く納得している様子がないが、時間が押している様でこれ以上答める気はなく

次の説明をする場所へ移動した。

その場所は、2年生の学園寮の寮長室と書かれた部屋だつた。

「えつと～またですが…なんでここに…？」

「前までここに居た、教諭が寿退職されてな…ちよつと欠員が出来ていたところだつたのだ。

情報の授業を担当してもうつのも、その関係だな。」

「へえ～つまり、その寿退職された方の埋め合わせをやれ…と？」

「やつらの事だ。では、これだけ分かっていれば当面は問題ないだ
ら」

明日は、朝の8時までに職員室に来てくれ。ではな。」

最後に来る時間帯を指定してから、千冬さんは去つて行つた。

「はい。お疲れ様です。（なんていうか…あれだな…仕事はちゃんと
とやる、厳しい人だな…）

そう言う人に限つて、私生活はグータラしてんだよな…　ｗｗ
おつとこんな事を考えてると、出席簿が飛んできそうだ、やめやめ。
）」

アルは、割り当つられた部屋に帰ると荷物を置き、すこしかたづけ
ると

千冬さんの人柄について考えていた。

そしたら、突如アルの携帯が鳴り響く。

「…誰だ？」

通話ボタンを押すと、掛かってきたのは、アロンだった。

「なんだよ。こつちは疲れてるの、切るぞ？」

めんどくさい言ひ方、電話を切らつとするが、アロンは必死に
止める

『まつて下さる薄情者。おつと間違えました、アル。』

「切るぞー。」

『すいません。それより、明日はおひな祭りになりましたか?』
『は
一田のノルマの武器を作れば、好きにしていって言われましたが
…』

「…情報の教師をすることになった。」

『それは、また…まあ、詳しい話はまた後日でもしましょう。そ
れでは。』

「ああ、じゃあな。」

そして、通話を終えると見計りつっていたかの様に、ドアがノックさ
れる。

「はーい（次から次へと何なんだ？）」

ガチャ

ドアを開けると、青色の髪をした女子生徒がいた。

「やあ、ボブ。ひさしぶり。」

「いや、ボブって誰だよー。」

「あなたよ?」

「疑問形ー?」

いきなり、コントを始めた一人、実は、結構相性があつたりするのかもしれない。

「いや、ホント誰ですか？」

「J.Jの生徒会長の更識樋無です。」

更識と聞いて、アルの眉がピクリと跳ね上がる。

「わざわざあいさつに来てくれてありがとうございます。アルフレッド・バウムガルトだ。よろしく。

（更識…確かに日本の対暗部用暗部とか、ミーティングで言ってた気がする…言ってなかつたけ？

どちらにせよ、すこし警戒した方が良さそうだな…）

そして、握手の手を差し出す。

「ええ、よろしくお願ひします。（ふーん、ドイツ軍入って聞いてたけど…特に何もなさそうね…

安心したわ。この人より、あのラウラ＝ボーデビッヒさんが、危険ね。）

樋無さんもその手を取る。一人は、すこしづかり性格が似ているようだった。

それから、樋無さんは一、二言話した後、自室に帰つて行つた。それなりに上機嫌だつたのがなにやら腹が立つアルだつたが、嫌いには、なれなかつた。

櫛無さんが去つてから、アルは旅のつかれやいろいろな疲れですがに寝てしまった。

第10話（後書き）

明日は、金曜日なので更新できないかもしれません。
今日中に、ストックが出来れば、明日更新できます。

千冬ちゃんと樋無さん登場。

私の初投稿の方では、ヒロインだった人と途中で出てきて空気にな
った人です。

それにして、なんでクラリッサをヒロインにしたんだろう?
まあ、いいや。

それでは、また。

第1-1話（前書き）

金曜日だけど、更新出来ました。よかったです。

アルと楯無さんの顔合わせ及び千冬さんのチュートリアルの次の日、アルは、指定された時刻朝の8時の5分前7時55分には、すでに職員室で千冬さんを待っていた。幸い、千冬さんも時間には厳しいタイプだったので、一切待つという事がなかつた。

「むー早いんだな？」

以外という文字が似合う顔で尋ねる。

「5分前行動が自分の美学ですので…」

「以外だな…」

千冬さんがそう思つてしまつのも仕方がないことだ。

普段のアルを見ていると、時間にルーズな性格だと思われてしまうだろう

だが、彼は、こう見ても技術者だ、何かを作るのに熱中して時間を忘れてしまうことも多々ある。

そこから、なにか学ぶ物があつても、なにもおかしくはないのだ。

「まあ、そういうことです。」

「へーまあ、いい。今日は、授業の時以外、私と共に行動してくれ。(さうでないと、生徒達の餌食になるのは

田に見えていたからな……）

「……ああ、なるほど、わかりました。」

アルは、千冬さんの意図を理解したようで、納得という顔をしている。

「うむ、（流石に、技術者だけあって理解力はあるようだな……よかつた。）では、

そろそろ一年一組に向かうからな。」

時計を確認すると、もう8時30分。そろそろ、朝礼が始まるところだった。

「はい。お供します。長官。」

もちろん、冗談で言っている、千冬さんもBAKAではないので気付いているが、その性格故、出席簿でブン殴る。どんな性格だよーとこいつこみはなしだ。

「織斑教諭もしくは、織斑先生と呼べ。いいな。次、長官と呼んだら殺す程度では、すまんぞ。48の殺人わざと52のサブミッションを連続でかけて……

地獄のローラーでお前を、ミンチにするからな……覚悟しておけよ……！」

「えー？ そんなに…マジで…？？？ 怖ー（この人ならやりかねんぞ…）」

「冗談だ。せつせつと行くぞ、時間がない。」

「あ、ホントだ、急ぎましょ。」

時計は、8時40分を指していて、もう、朝礼が始まっている時間で職員室には、一人しか残つていなかつたので、すぐに1組に向かつた。

スタスター、ダダッダ、ダダ

規則正しい足音と、不規則な足音が廊下に響いていた。

「…（ちよ、織斑教諭…はや…い）」

千冬さんは、とんでもなく歩くスピードが速いのだ。アルは、走らないと千冬さんに追いつけないため、息切れまでしている。

そういうしている内に、1年1組の教室に着いた。

中は、先生が来る前だけあって、今だに多少ざわついた雰囲気だ。

ガラ！

一切の躊躇なしドアを開けると、ざわざわとこの雰囲気は、一掃される。

それは、即ちこのクラスに置ける、千冬さんの信頼度？が高い事が分かる。

シーンと静まり返つた教室を千冬さんは、スタスターと進んでいく。

一方、あっけにとらっていたアルは、立ち止まっていた。

「よし、それでは、朝礼を始めるとの前に、何をしている、早く来い。」

そんなアルを、千冬さんは教室に呼びよせる。アルは、ハツとなつて、ふらふらと教室に入つてくる。

すると、千冬さんの影響で冷え切つた教室の温度が僅かばかり上がつた様な気がする。

何故なら、アルが男だからだ。

「…あーども、アルフレッド＝バウムガルトです。情報の担当をすることになっています。

自分の事は、親しみをこめて、皇帝陛下と呼んでください…じゃなかつた、アルとよんでもください。」

そして、アルの自己紹介が終わると、さわかに上がつていた教室の温度がさらにも上がる。

「あ…」

「あー（あ、何？）」

「…」

耳をつぶれような悲鳴が上がり、アルは思わず耳をふるぐ。

「（こ？こ？）」

アルは、何があったのか分からずには混乱している。

「いい！年上のお兄さん系！」

「織斑君との禁断の関係に……ぐはあ……」

「アル×一夏、一夏×アル……どっちもありね……ハアハア……」

「三点リーダーの使用頻度が、高いが気にしない。」

それはさておき教室は、腐女子が騒ぎ出し、大変なことになつた。だが、彼女らは失念していた、今が朝礼の時間だという事を……

「んん！」

シーン、咳払い一つで教室を平定する。

「よし、今日は、これといった連絡はない。では、朝礼を終わる。」

そう言って、千冬さんは、外へ出ていく。

ちなみに、アルは次の授業が情報のため、教室に残っている。

その日の授業が、アルの質問攻めで終わったのは、言つまでもない。

第1-1話（後書き）

次回は、一夏視点のアルを書きたいと思っています。

モチベーションが持たなかつたので、読みづらくなっています。

それでは、また明日。

第1-2話（前書き）

今回は、一夏視点です。

うまく書けたかな？元からうまくないですが…

第1-2話

side一夏

画面の前のみなさん、こんにちは。
そして、初めまして。織斑一夏です。

え～今日は、千冬姉、織斑先生が朝礼に遅れてるだけ?
なにがあつたのか?

「チチチチチ、ダダダチチダダ

おーーーの足音は、まぎれもなくちふよ、織斑先生の物だ。

それより、後ろのこの足音は、なんだ?
たまに、ハアハアって声が聞こえるんだが、まさかー千冬姉の身に
危険が!?

それは、ないか…どうせ、ち…織斑先生の歩く速さについていけないんだらう?
はやいもんな。ていうか、いいのか。皆、喋つてて。そろそろ、来るぞ。

ガラッ

ドアが勢いよく開かれる。すると、すぐに喋り声が消える。

おーと、ち…織斑先生が来てもうた。

きりつとしないと出席簿に呑かれるからな。 あいつとしづかでも呑
かれるけど…

「よし、朝礼を始めるつとその前に、何をしていろ、さつさと入れ。」

すると、ふらふらと、金髪のスラッシュした男が入ってくる。

誰だ?... ん?男?てことは... やばい... つかなくなる...

「…あ！ども、アルフレッド＝バウムガルトです。情報の担当をす
ることになっています。

かつた、アルとよんぐださい。

なかなか、面白こじとこりんだな… 皇帝陛下… どうやつたら間違えるんだ?

自己紹介が終わり、教室の温度が上がる。そして、

۱۰۰

やばあい、来る。ソーックブームが！

ぬぬぬ……耳ふさいでも通り越してくる……

ほら、バウムガルト先生だけ？あつけにとらわれたりやつてゐるて。

「いい！年上のお兄さん系！」

「織斑君との禁断の関係に…！ぐはあ…！」

「アル×一夏、一夏×アル…どつちもありね…ハアハア…！」

初めのは、まだ良いけど…いや良いのか？それより、最後の一人！特に真ん中のやつ…なんで吐血してるんだ？つと…今は…織斑先生の管轄時間なんだ、声を出したら、殺される。

皆、忘れてるのかな…？

「んん…！」

ち…織斑先生の咳払い一つで、静かになつた…やつぱす「このか？」

「よし、今日は、これといった連絡はない。では、朝礼を終わる。」

それなら、朝礼しなくてもいいんじゃ…いや、なんでもないです。こう思つた俺に、一にらみしてちふ…織斑先生は、どつかへ行つた。こわかつたな／＼なれないな…あのにらみ。

ん？バウムガルト先生は、まだ残つてる…授業か…ちょうどいい、話しかけるか！

「あ〃」

「先生、先生！今、いくつ？」

話しかけようとしたら、後ろから遮られた。おい、空気よめって……？お前が言うな？気にしないでくれ。

結局、話しかけれずにこの授業は、終わった。ちくせつ。

第1-2話（後書き）

一人称つて難しいですね。 私だけでしょうか?
まあ、いいです。

次は、シャルとラウラが学園にやつてきます。
それでは、また。

第1-3話（前書き）

— お詫びですいません。

アルが、1年1組との対面をした次の日の朝。午前5時といふじょうじ、寝てゐる時にラララから電話があった。

ペニコニ、ペニコニ、

「…はーい…あるふれつじ=ばつむがるとでーす。おはー」

寝起きで、テンションがおかしい。

「…しゃきつとしりー全く…今日から、私が学園に行くからな。では」

朝の5時にそれだけを云えて、電話を切る。

「…」

アルは、切れた電話に何も気に掛けず、机の上に放り投げると、そのまま、ベットへダイブした。

だが、微妙な時間に起されたので、眠れなかつた。

「…寝れん…仕方ない、食堂開くまで技術課のとこ、行くか。」

結局、特別技術課の面々が居る所へ向かうことにした。

朝の早い時間帯だけあって、ほとんど人は居なかつたので、注目を浴びることなく

特別技術課に到着する事ができた。

「ういー、大将ー生中ー！」

「はー、生中ーつね。まいどー…つてーちつがーうー…なにしにきたんっすか？」

アルのボケを拾ったのは、以外にもカーターだった。

「はいー ナイスつっこみー」

「…＼(^○^)／」

「…＼(^○^)／」 アロンだよー！

アロンが、ジャンのまねをしている事に何故かしら、すぐに気付いたアルは疑問を抱く。

「なにしてるんだ? アロン、ジャン。」

「(^__^)」

「(^__^)」 アロンだ(^__^)

「いや、わかんねーよー。」

流石のアルにも、同じ表情をされては、読み様がない。
そんなアルに、救いの手が差し出される。

「あー、今アロンさん、急にジャンの気持ちを知りうとか言い初め

て……真似してゐるんですよ。」

「はあ～、がんばるね、アロンも……（でも、あれじゃわからんねえんじゅね？）」

そして、ちらりとアルが時計を見ると、6時になるかな？なこというとこだった。

「（ふ～確か食堂つて6時に開くんだったけ～）おはようございます、さっこせい！」

一緒に朝食へに行くか？」

「……え～と、今日の所は、遠慮しま～（注目、浴びかけられ……）」

「わっか、わかった。じゃあ、俺一人でこいつへくるわ。じゅな。」

そりゃ、すぐこいつへこいつへ。

「こいつへ」

「（<><>）～」

「（<><>）～」アロン（トト）

「……がさばつすかー。」

「おひ、じゅあ、またな。」

アルは、食堂へ歩いて行った。
5分もすると、食堂へ着いた。ちなみに、アルは一夏達に随分、
年生の食堂ではなく

2年生の食堂で食事を取ることになつている。

食堂へ入ると、開いたばかりだけあって、ほとんど人が居なかつた。アルが、食堂を見渡すと初めてこの学園に来た時、態々あいさつ?に来た、青髪の少女…樋無さんが居た。

「（「へん…話しかけてみるか…）」

やつ思い立ち、樋無さんに話しかける。

「やあ、」

「ああ、先生。どうぞ。」

樋無さんは、話しかけるアルに正面の席を進める。

「さんくす。」

「ええ、はあ…」

「…どうした?最近、いじらないし、給料下がるし…いじらない、
サラリーマンのようなため息ついて…?」

アルの容赦ない一言が樋無さんを抉る。

「うぐつ…なかなか、言いますね。」

「…? そつか? それより、なにがあつたんだ? 力になれるかもしけないぞ!」

「アーランソウ。…最近、やけに襲撃とかが多いんです。対策を練らな」と…」

「なるほどね…まあ、月並みだけど…がんばれーあーそつだ。これ上げる。」

そつに、懐から薬の入った瓶を取り出し、それを植無さんに渡す。

「え? これは?」

「『つかれには、『れーリポビタンド×m3』だー』これを飲むと、疲れが一瞬で吹き飛ぶぞ!」

ちなみに、この薬には珍しく悪い副作用が存在しない。

「あ、ありがとうございます。」(著作権って言葉を知らないのかしら…?)

「うむ、ではな。」

「はー、また。」

そして、アルは、食堂を出て教室へ向かった。

第1-3話（後書き）

遅くなつたのには、理由があるのです。

更新が止まつた最初の日、つまり18日ですね。
この日は、作者が大好きなSKE48の名古屋握手会があつたのです。

朝の5時から行つて、夜の12時に帰宅。何時書くの？

19日は、学校から帰ると同時に、カラオケへ行き、SKE歌ついたら

21時…帰つたら22時、小説書く気にはなれませんでした。

以上の理由から、無理でした…すいませんでした。

SKEいこよ。SKE…最高です。じゅりなかわいいよ。じゅりな。

それでは、また。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1007z/>

黒ウサギ隊の5人組（仮）

2011年12月20日21時55分発行